

高瀬堰の概要

- 高瀬堰は、太田川水系幹川（河口から約16km地点）の三篠川、根谷川合流点下流に設置されている、「治水・利水・発電放流水の調整」を目的とした多目的堰です。
- この堰の下流部は広島市街をひかえていて、中国山地を流れ出て澄んだ豊かな太田川のデルタの上に長い間、城下町として栄えてきた所で、海の幸、山の幸に恵まれたのどかな都市、中国地方随一の大きな都市「水の都」広島として発展し、約60年を経た現在では国際文化都市として発展を続けています。
- 広島市街を流れる「母なる太田川」は、昭和7年、直轄改修工事として放水路工事に着手し、幾多の困難を克服し30余年の年月と約200億円の巨費を投じて昭和42年に放水路は完成しました。以来、中流部の右派川古川沿川の急激な都市化に対処して、これを締め切ることに重点をおき、昭和44年に一応締切りを完了しました。しかし、当地点には中流部右岸一帯のかんがい用水を取水している高瀬井堰（固定堰）があり、これを可動堰にすることによって洪水疎通能力を確保し、古川締切りに伴う本川流量の増加に対処する必要がありました。



太田川流域図

高瀬堰の概要

- 利水面では、太田川は古くから発電に利用されているとともに、下流部では上水道用水として日量30万m³、工業用として約30万m³、その他のかんがい用水としても利用されていましたが、いずれも自然の流況のまま取水していたため、渇水時には塩分の被害も出る状況でした。
- 一方、広島市を中心とした広域都市圏は、当時飛躍的な発展を遂げるとともに、島諸部の水不足問題など、都市用水の急激な需要増大に対処するため、新規に用水を開発する必要に迫られていました。また、土師ダム（江の川）からの分水発電は、電力需要の面から1日のうちに時間的変動がありましたが、この水を都市用水として安定した取水を計るために、逆調整用の貯水池が必要となっていました。
- これらの3つの問題を解決する方法として、多目的堰となる高瀬堰構想が生まれ、昭和42年度から調査に着手し、45年度には実施計画調査を行い、46年度から本体工事に着手して以来完成まで4年の歳月を要し、昭和50年10月に完成しました。
- なお、この堰は温井ダムをはじめとする上流ダム群とともに、太田川の最下流部における利水コントロール施設としての役割を果たすものであり、広島地方生活圏の水資源の要となっています。



高瀬堰斜め写真（H25年撮影）